平成２７年度卒業生・修了生調査協力者会議
意見交換会　議事要旨

開催日時：平成２７年１１月２２日（日）１０：３０～１３：００
開催場所：センターホール２階　大会議室
出席者　：【卒業生・修了生】
課程長・専攻長からの推薦者２１名（平成１８年度～平成２６年度の卒業生・修了生）
【本学】
大谷芳夫 総合教育センター教育評価・FD 部会長　ほか全１９名
陪席者　：学務課職員４名

１．開催主旨

本学の学部卒業生、大学院修了生を本学に招へいし、授業内容・方法や学生生活等に関する事項について調査する。卒業生・修了生の体験に基づいた意見を参考にすることで、今後の本学の教育内容・方法の改善に役立てる。

※冒頭、大谷教育評価・FD 部会長より本会議の開催主旨について説明があったのち、出席者の自己紹介及び近況報告が行われた。続いて、森迫総合教育センター長から、「３×３教育制度」やSGU 事業、COC 事業の実施に伴う教育改革の概要説明があった。

２．意見交換要旨（●は卒業生・修了生、○は教員）

※別紙アンケート集計表を参考に、意見交換を行った。

＜教育について＞

●インプット型の授業は充実していたが、アウトプット型の授業が少なかったように感じる。
●「デザイン経営工学演習」は、企業と連携した実践型の授業であり、課題解決能力やプレゼンテーション力など、社会人として役立つスキルを身につけることができた。
●他研究室・他課程・他専攻の学生との交流の機会がなかったので、授業の一環として異分野の学生との協力や交流を促すような取り組みを実施してはどうか。
●修了要件として修士設計が求められる専攻においても、修士論文を書く方が良いのではないか。社会に出てから、論文執筆の経験をしておいた方が良かったと感じている。
○現在の建築学専攻では、特定課題型の学生にも論文課題を与えている。
●Tech Leader とは具体的にどのようなリーダー像を想定しているのか。
○チームをまとめて統率することが得意なタイプの他に、専門分野で自分の役割を果たしながら周囲と協力することが得意なタイプもいる。リーダー像の捉え方は一つに限らず、個性や強みを生かした教育をすることが必要と考えている。

＜外国語について＞

●多くの企業が中国やインドに海外拠点を置いている現状では、英語だけではなく、中国語も求められる。現に中国では英語を話せない人が多い。
○SGU の取り組みの一環として、図書館にグローバルコモンズを設置し、ネイティブ講師や留学生による英語以外の外国語学習の機会を提供している。
●授業では英語のコミュニケーション力はつかなかった。社会人になってからではなかなか学習の機会を作れないので、学生時代に半強制的に学習する機会を作るべき。

●語学の単位はほとんどの学生は学部の２年前半で終わってしまう。在学期間（学部・大学院の６年間）にもっと英語に触れられる時間を作るべき。
●科目を開設していても何人が受講するかわからないので、語学の必修を増やすなどの措置を考えても良いのではないか。
○現在、SGU 事業の構想調書に掲げる目標（学部生 50%が TOEIC730 点以上）を達成するために、学部の英語カリキュラムの抜本的改革を行っている。この改革では、英語の必修を４単位から６単位に増やすことを検討している。
○研究室に一週間に一回、ネイティブ講師を招いて英会話講座を開催している。スピーキング力は向上しており、学会のポスター発表をこなせる程度の力がついている。
●英語の授業は面白くなかった。専門分野を英語で学ぶなら、英語に対する学修意欲も向上する。
○専門知識の浅い学部段階では、まず日本語による教育が重要と考えている。その上で、大学院で英語による専門科目を履修するのが望ましい。
●論理的に考えるのは母国語の方が良い。
●英語によるプレゼンテーションテクニックを学ぶ講座（正課外）が面白かった。実際に使う場面を想定したトレーニングを伴う授業が良いのではないか。

＜３×３について＞
●M0 の一年間を研究に費やせるのであれば意味がある。実際には院試の時期に影響されるのでは。
○３×３教育制度の取り組みとして３年終了時点での成績や達成度テストにより早期に大学院推薦入試の受験資格を与えている。
○電子システムはこの改革に伴い推薦枠を大幅に増やすなど大きく変更した。余った一年間で何をさせるかが重要と考えている。
●研究に集中することにも意味がある。学会活動に積極的に参加する機会を増やすべき。学会での研究発表の経験は、就職面接で研究成果を説明する際に役立つので、自信につながる。
●他分野の学生・教員とのかかわりや、インターンシップ等による社会とのかかわりを通じて、視野を広げることが重要。
●他研究室や他課程・専攻の研究内容を知る機会は卒論・修論発表会に限られていた。もっと交流があればよかったと感じている。
○実際には「ベンチャーラボラトリー」において分野横断型の研究活動を行っている。情報発信がうまくできていない。

＜情報発信について＞
●プログラムの存在が学生に浸透していないのは、情報発信の方法にも問題があるかもしれないが、教育コンテンツそのものに魅力がないことが原因ともいえる。
●そもそも活動の幅がせまい。ロボコンや学生フォーミュラ、iGEM の活動も、参加学生の学域が偏っている。
●授業中の教員からのお知らせは波及効果が高いのではないか。
●大学からの発信情報は、説明文がかたいので読む気が起こらない。例えば卒業生の視点から、より親しみやすいポップな形式で授業の良さを紹介するようなものがあれば良いのではないか。
●大学から学生宛のメール量が多い。過剰になれば、かえって読まなくなってしまう。
●学生生活に関する相談や大学に対する意見を気軽に言えるようなツールがあると良い。SNS を活用するのはどうか。

＜就職について＞
●本学は一般には知名度は低いが、企業に限って言えば十分な知名度があるため、大学の知名度の低さが就職活動に影響するということはない。

●３回生の就職活動時に、文系就職か理系就職かで悩んだ。１回生などの早い段階でインターンシップに参加しておけば、社会に出てからのイメージができるので、スムーズに就活に取り組めるのではないか。

〇インターンシップ経験者の体験談を聞く機会などを設けて、インターンシップの良さを発信していく必要がある。

〇大企業に限らず、中小でも活力のある企業に送り出したい。